

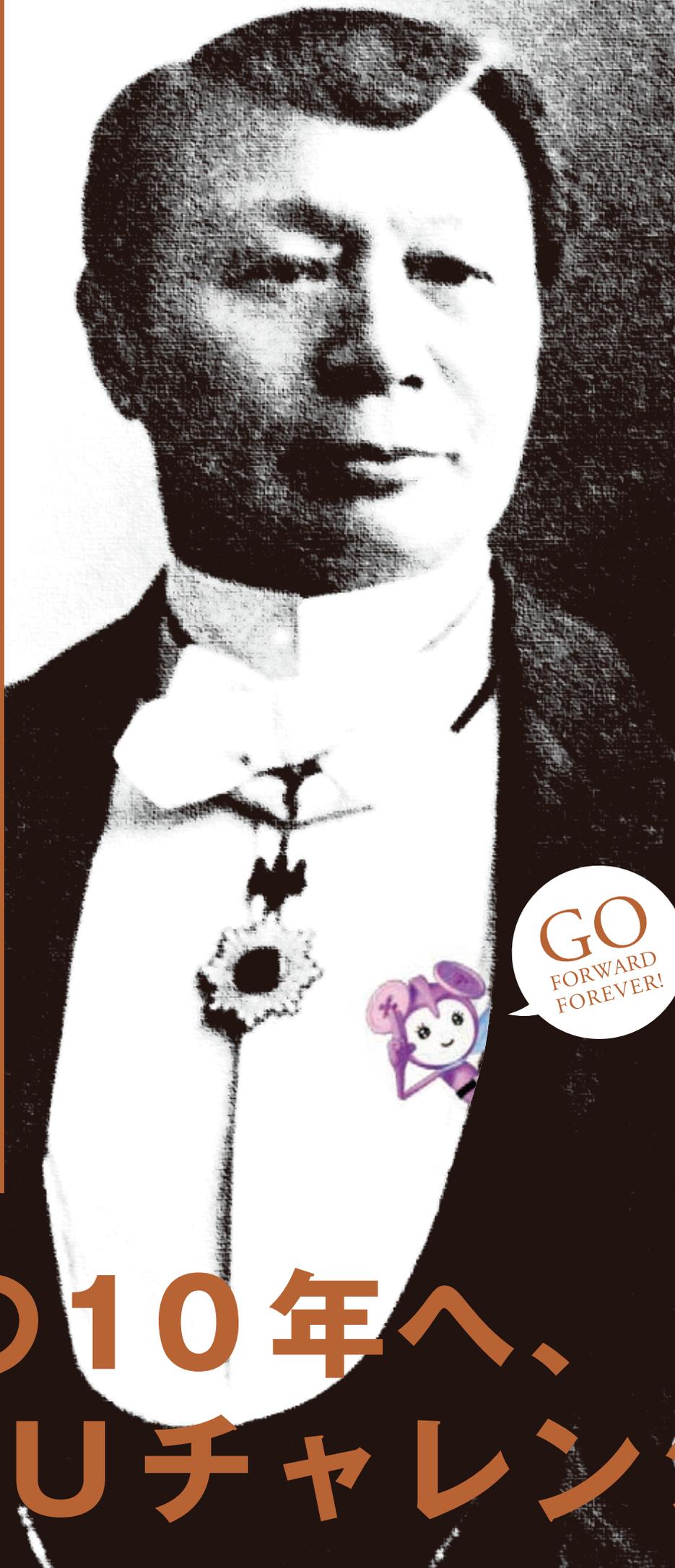
# 東京経済大学報

2010年度

新春号

第43巻第2号

十一  
x  
÷  
TOKYO  
TOP30  
計画



# 次の10年へ、 TKUチャレンジ®

# 東京経済大学

# 創立百十周年記念式典

二〇一〇年十月二十三日(土) 国分寺キャンパス

## 式辞

学校法人東京経済大学 理事長 村上勝彦

本日、ここに東京経済大学の創立百十周年記念式典を挙げてまいりました。私ども当大学関係者が心から喜びとするところでございます。この式典挙行に当たり、納谷廣美・日本私立大学連盟副

会長、加治章・葵友会会長をはじめ、多数のご来賓のご臨席を賜りましたことは、東京経済大学にとりまして非常な名誉でございます。厚く御礼申し上げます。またご参列の方々、百十年の歴史を通じて本学にご支援を賜りましたすべ

設を決意しましたのは、当時、我が国は、外国との条約改正により、外国人・外国商人に対する国内での居住地の制限、および商業活動地域の制限を撤廃することになったことが、主な理由でした。当時、この外国商人の活動の自由化は、幕末の開国に続く、我が国「第二の開国」と呼ばれており、対するに、我が国商人の商業知識は当時未だ旧態依然たるものがあ

東京経済大学は、明治三十三年、西暦一九〇〇年に、一代にして大倉財閥を築いた大実業家、大倉喜八郎によって創立された大倉商業学校がその起源となります。現在のホテルオークラのある場所が大倉の本邸でありましたが、それに隣接した東京赤坂葵町に大倉商業学校の校舎が建てられました。

創立者、大倉喜八郎が商業学校の開

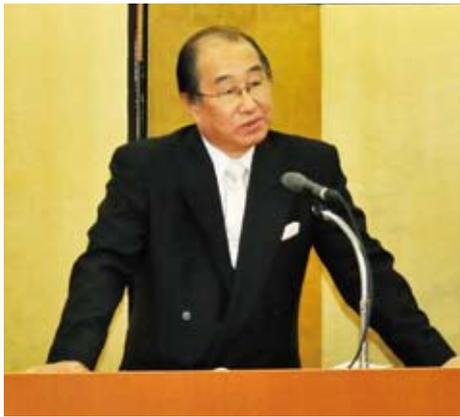
大倉は、このままでは条約改正の成果はすべて外国商人に吸収される、との強い危機感を抱き、外国商人と対等にわたりあえる、世界共通の商業知識をもった商人を育成することが日本の急務であり、そのためには教育こそが何より大切であると考えて、私財を投じて商業学校

## 創立110周年記念行事として、「次の10年」を考えるシンポジウムシリーズを開催しました。

9月15日(水)には「新分野・新企業が創る東アジア新時代」と題するシンポジウムを、日本経済新聞社内の日経ホール(東京・大手町)で開催。ビジネスパーソンや政府関係者など400名あまりが参加しました。

10月1日(金)には「東アジア改革の行方」と題して、六本木ヒルズ森タワー・アカデミーヒルズ49で開催。約600名が参加しました。

●シンポジウムの様子は、本誌裏表紙でもご紹介しています!



を設立したのであります。

このように、本学の前身である大倉商業学校は、今日の言葉で申すならば、グローバルスタンダードに則つて、国の内外で仕事ができる人材の育成を目標として設立されました。また、創立者の精神を体現した「進一層」というチャレンジ精神、ベンチャー精神にあふれた人材の育成を心がけました。これが本学の建学の精神であると言えます。

このような趣旨による学校設立であったため、この構想は当時の我が国各界から大きな支持を得ることになりました。その後、大倉商業学校は大正九年、一九二〇年に大倉高等商業学校に昇格し、私学屈指の高等商業学校として高い社会的評価を得ていったのですが、第二次世界大戦とその敗戦の影響により、赤坂葵町の校舎は焼失し、戦後の財閥解体の影響で大倉家からの支援がなくなり、また、戦後の学制改革により高等専門学校全体が消滅の危機をむかえるという、創立以来最大の危機に直面することになりました。

廃墟の赤坂葵町から国分寺に移転して、自力による再建と大学昇格の方向を目指し、教職員と学生が一致協力して、懸命の努力をいたしました。そして、一九四九年に、ようやく経済学部だけの単科の、新制東京経済大学として新たな出発

をすることができました。大学創立時の専任教員数はわずか十七名であったように、本学は、戦後に、単に旧制の高等商業学校から新制大学へ発展したというよりは、ゼロからの再スタートを切ったといつても良いほどです。

その後、日本経済の高度成長、大学への進学率の上昇を背景に、東京経済大学もいわば高度成長の時期に入り、教職員の増加と施設の整備を進めつつ、経営学部の増設や大学院の設置を行うなど、大学としての内容を整えていきました。

近年、一方で我が国の国際化、高度情報化、法化社会が進展し、他方で社会の少子化が定着する中で、我が国の大学すべてがそうした社会変化に対応する改革を要請されるに至り、本学も新たな転換期に入りました。その際、私ども私立大学の特徴である、保持する建学の精神に則つて、この変革期に積極的に対応することといたしました。

十年前に迎えた創立百周年を一つの目標時期にすえ、既存の学部・学科体制の一大再編をめざして、新たにコミュニケーション学部、現代法学部、経営学部流通マーケティング学科を設置し、百周年記念式典を迎えました。

この創立百周年から今日までの十年、さらに経済学部国際経済学科と大学院の増設をおこない、また、二十一世紀教

養プログラムを設置し、同時にカリキュラム改革を実施し、最近ではTKUチャレンジシステムを導入するなど、4学部6学科体制の充実をはかつてまいりました。

このように、本学の特徴をより明確にすべく、教育研究の思い切った現代化と総合大学化を図ってきたのが最近の歩みであります。

いま申し上げたように、東京経済大学は大倉時代以来の伝統を受け継ぎながら、その時代の要請にこたえるべく、改革をすすめてきました。しかしながら、まだまだ多くの課題を抱えた、発展途上の大学であると、自覚しております。

私どもは、東京経済大学に与えられた使命を自覚しつつ、与えられた課題を一つ一つ克服し、社会・国民の負託によりよく応えられる大学を創る決意でございます。なにとぞ、今後一層のご支援・ご鞭撻を東京経済大学に対して賜りますよう、皆様に関心をお願い申し上げます。

本日は、誠にありがとうございました。



## 建学スピリッツ「進一層」が 記念酒に!

卒業生が社長を務め、「久保田」で有名な蔵元・朝日酒造の協力を得て、創立110周年記念式典の記念品として、大吟醸「進一層」が千本限定で誕生しました。ラベルには「進一層」を具現化したキャラクター「TKUチャレンジャーズ」と創立年をあらわすエンブレムをあしらいました。記念酒「進一層」の話題は蔵元の地元紙「新潟日報」(昨年11月10日付け)で紹介されました。

## 謝辞

## 東京経済大学 学長 久木田重和

本日、かくも多数のご来賓のご臨席を賜り、ここに、東京経済大学創立百周年記念式典を挙行できましたことは、本学にとりましてまことに光栄であり、大学を代表して、厚く御礼申し上げます。

先ほどは、本学が所属しております日本私立大学連盟の副会長でいらつしやいます納谷廣美・明治大学学長先生より本学に対する期待を込めた暖かいご祝辞を

賜りましたことを心より感謝申し上げます。

また、日頃からあらゆる面で東京経済大学の発展を支えてくださっている本学の卒業生団体校友会の加治章会長からは、卒業生として大学への熱い思いと心強い激励を込めたご祝辞を頂き、誠にありがとうございます。

二〇一〇年十月二十三日のきょう、東京経済大学は創立百周年を迎えました。東京経済大学が百十年の歴史を重ねることに貢献されたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

百十年の輝かしい伝統を継承しつつも、それに甘えることなく、新たな伝統を築いていくことが本学の責務であります。そこで、創立百周年を期し、次の十年へ向けて、東京経済大学は「TOKYO TOP30計画」を掲げ、ここに、さらなる発展をお誓いいたします。

「TOKYO TOP30計画」とは、東京都・神奈川県・埼玉県の一都三

県にある国公立あわせて二百余りの大学において、教育を中心とした七つの分野で、それぞれ上位のポジションを目指す計画です。

本学はこの計画の実行を通じて、建学の理念である「進一層」と「責任と信用」に基づき、チャレンジ精神に燃え実践的な知力をも身につけた次世代を育てていきます。

「教育品質」でTOP30を目指します。大きすぎないという、東京経済大学の特性を活かし、ゼミなどの少人数教育をこれまで以上に充実させます。教職員の目配りがいきとどいた大学として、学生たちをみつちりと教育し教育品質を一段と高めていきます。

「研究業績」でTOP30を目指します。すぐれた研究は、すぐれた教育を呼び起こします。建学の理念である「責任と信用」を胸に、まっすぐに社会と切り結び、よりよい明日を探る迫力に富んだ研究活動を推進いたします。

「就職満足度」でTOP30を目指しま

す。最新の調査では、受験生が東京経済大学に魅力を感じたベスト3は、「資格取得への期待」、「就職への支援」、「就職率」でした。就職活動のテクニックの伝授に留まらない、質の高いキャリア形成をサポートします。

「学生支援」でTOP30を目指します。経済情勢の厳しさは、学生生活にも影響を与えています。東京経済大学は各種奨学金を拡充し、学生の皆さんが、安心して学び、課外活動ができる支援システムを整えます。「よい大学生活」を送った卒業生は、後輩の支援にも積極的になるものです。東京経済大学では、教職員・卒業生が親身になって学生をサポートしており、これを一層充実発展させます。

「環境の良さ」でTOP30を目指します。東京名湧水「新次郎池」があり、30種近い野鳥が生息するキャンパスにおいて、一層の環境マインドを醸成していくためにも、本日、「TKUEコキャンパス宣言」を行い、今後も、武蔵野の面影が感じられ



## 総合力で目指します「TOKYO TOP30計画」



る生態系の保全に努めていきます。

「国際性でTOP30を目指します。協定校、友好校など、海外提携校との関係を強化します。海外への留学生を増やすとともに、海外からの留学生も増やします。世界で活躍する人材を育成するために、グローバルキャリアプログラムをより一層展開します。

「社会貢献」でTOP30を目指します。

建学の理念である「責任と信用」は、つねに社会的な視野を持って、ということでもあります。国分寺地域、多摩地区、首都圏内、日本国内、アジア地域など、各レベルにおいて、外部組織とのコラボレーションを通して、社会貢献を進めていきます。教育現場でも社会との接点を強化します。

以上、東京経済大学は、次の十年に向けて、教育を中心にした七つの分野での一層の充実・発展に邁進することを宣言いたします。

次に、環境についてはTOP30宣言の一環として「TKUEエコキャンパス宣言」を掲げます。ここ国分寺地域には、現にカワセミが息絶しております。また、本学国分寺キャンパス南側には新次郎池という湧水があり、これは東京の名湧水57選に選ばれています。このように本学は国分寺崖線に沿った武蔵野の豊かな自然とともにキャンパスがあります。これまでもこれらの自然を保護してきた大学として、自然との共生の重要性を認識し、持続可能な社会の構築への寄与が本学の重要な責務であると考えております。本学創立百十周年にあたり、ここにあらためて、本学キャンパスに集うすべての者が、持続可能な社会の創造を自らの責任として自覚し、エコキャンパスの一層の推進を目指すことを宣言いたします。

具体的には、環境方針に掲げております九項目の内容に取り組んで参ります。

- 一、国分寺崖線に沿った緑の回廊にある国分寺キャンパスの生態系維持を目指します。
- 二、湧水・新次郎池を有する大学として水循環に配慮したキャンパスづくりをすすめます。

三、二〇二〇年までに、キャンパスにおけ

るエネルギー使用量10%削減を目標とします。

四、環境負荷の少ない製品の利用やリサイクルの強化を図り、二〇二〇年までにゴミ排出量の二十五%削減を目標とします。

五、騒音・排ガスを減らし、学内全面禁煙を進め、清浄なキャンパスづくりを目指します。

六、すべての学生が環境マインドを身につけるよう、環境教育を充実します。

七、持続可能な社会を作り上げることに貢献する研究活動を充実します。

八、良好な地域環境の再生・創造のために、地域との連携・地域への貢献を強化します。

九、総合的・計画的に環境方針を実現するエコキャンパス実施計画を策定し、実現に努めます。

最後になりますが、本日、ご多忙の中、ご参列くださいました皆様に改めて感謝申し上げますとともに、東京経済大学に対しまして今後ともますますのご指導、ご鞭撻を賜りますよう、高い所からでございますが、お願い申しあげて、謝辞いたします。

本日は誠にありがとうございました。

# 「質の高い就職」 をめざして

## TKUエンプロイアビリティ 養成プログラム

2011年度よりスタート!

### 「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」とは?

#### 継続して働き続けるための力を育成する

百十年の歴史を通じて、東京経済大学は経済界を中心に、多くの有為な人材を送り出してきました。「進一層<sup>®</sup>」の気概を持ち「責任と信用」を重んじる、実践的な知力を備えた人材は、グローバル社会において今後ますます必要とされています。

これまで、「就職満足度の高い大学」として高校生、高校教員や保護者からも広く認知されてきましたが、大学新卒者の雇用環境が悪化するなかで、大学生の社会人基礎力を高めて、就業力を育成することは、国の政策としても近年クローズアップされています。

そのような社会的背景を踏まえて、二〇一一年度より、東京経済大学は経済学部において「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」をスタートします。経済学部の正課として「キャリア形成科目」を展開しながら、学習履歴や課外活動などを記録する「キャリア・ポートフォリオ」を活用して、学生の就業力（エンプロイアビリティ）獲得をめざす取り組みです。実施に向け、経済学部とキャリアセンター等が一体となり、キャリア関連の実務家の招聘やアドバイザーの常駐、キャリアデザインの教材や大学独自の検定の開発などを段階的に行います。

#### 文部科学省「就業力GP」にも選定!

文部科学省では、国公私立大学を通じて、教育の質向上に向けた教育改革の取り組みを「優れた取組(Good Practice)」として選定しています。東京経済大学の「TKUベシックプログラム」は、二〇〇七年に「大学教育・学生支援選定事業」として、GPに採択されています。

「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」は、二〇一〇年度から新たに設けられた「大学生の就業力育成支援事業(就業力GP)」に選定されました。

東京経済大学の全ての学生を対象としている「TKUベシックプログラム」で建学の理念や社会的な常識など社会人として不可欠な基礎的な諸能力を身につけた学生たちが、「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」を通じて、より高度な就業力を獲得できるように、教職員が協働して支援していくこととなります。

#### 二つの「GP」が連携して「就職の質」を向上

##### TKUエンプロイアビリティ養成プログラム

##### TKUエンプロイアビリティ養成プログラム GP

労働市場において継続的に雇用され続ける諸能力を育成。正課内外の取り組みを、経済学部で4年間にわたって体系的に展開する。

##### ベシック GP 学部・学科の教育 アドバンスドプログラム

##### TKUチャレンジシステム

4年間を通して、学部・学科を問わず、すべての学生が企業や社会が求める基礎力とチャレンジ精神「TKUベシック力」を身につける。

高い就業力

# 体系的な支援で働き続ける力を育成

副学長（学生支援等担当）  
安川隆司 経済学部教授



二〇〇八年のリーマン・ショックを契機に冷えこんだ日本経済はいまだに、先行きの不透明感が払拭されぬまま推移しています。

大学新卒者の就職率（全国平均、昨年八月文科省発表）は六〇・八％（卒業者数のうち就職者総数の占める比率）で前年より七・六ポイント低下するなど、大學生の就職活動は厳しさを増しています。また、企業からは新入社員 の早期退職が問題視されるなど、現代は「職に就き、働き続ける」ことが困難な時代です。

国公立を問わず、全国の大学がこぞって就職支援に乗り出すなか、東京経済大学で始動する「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」はどのような取り組みなのか。その意義とねらい等について、学生支援等担当副学長の安川隆司経済学部教授に聞きました。

## 変化する社会で雇用され続ける能力を高める

「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」は、二〇一一年度、経済学部において展開していきます。「employability」という語は、「雇用される能力」という意味を持っています。「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」は、労働市場においてさまざまな環境変化があっても、継続的に雇用される能力、つまり職業人として環境に適用し、働き続ける力を養うことをめざした就職力向上のためのプログラムです。

「就職力」と言ってしまうと、内定を獲得するための力のように思われるかもしれませんが、あえて聞き慣れない「エンプロイアビリティ」という言葉を使っています。就職した会社で長く働き続けられることを強調しています。

ですから、内定率のさらなる向上も視野にあります。が、若者の離職率が高い今、本プログラムでは、卒業生を追跡調査して、彼らが働き続け、十分に力を発揮しているか、効果検証を行っていく予定です。卒業させれば大学との関係は終わりではなく、社会に貢献できる人材を育成する大学として責任を果たすために必要なことだと考えています。

### TKUエンプロイアビリティ養成プログラムの流れ



質の高い就職

## 学生との距離が 近い本学の強みを生かして

東京経済大学では、建学の理念と結びついた学びの基礎力を「TKUチャレンジシステム ベーシックプログラム」で10の力として掲げ、全学部において修得をめざしています。学生は学習センターを中心に自主的に学び、また一部は正課の授業の中でも展開しています。今回の「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」は、学生が「10の力」として身につけてきたものを土台に、さらに実社会で生かしていくために、発展させていくというものでもあります。

プログラムのアウトラインをご説明しましょう。まず、一年次に「キャリアデザイン入門」などのキャリア形成科目を履修し、学生が自己を理解して、卒業までキャリア開発のモチベーションを高めていくきっかけをつくります。二年次にはより実務的な内容にシフトし、インターシップなどのオフキャンパスのプログラムも展開。また企業の実務家を招聘した授業を行うことで、座学と就業体験の有機的な結びつきを図ります。そして三年次には就職活動を意識した内容を、四年次では社会との接続をより意識した内容へと段階的に発展していきます。

このようなキャリア形成のためのプログラムを、教員と学生の距離が近い本学の特徴を生かして、教員が学生一人ひとりと密に接しながら進めていくことになり。教職員の協働によって、一人ひとりの学生を面談などで把握して、サポートしていくわけですが、その際、より深く学生を理解するためにキャリア・ポートフォリオを運用していきます。

「ポートフォリオ」は、学生が作成した学習成果物等を収集したのですが、これは学生自身にとって、自らの学習効果を確認し、エンプロイアビリティの修得状況をチェックするツールにもなります。学習の記録や活動データを蓄積することで、自分は何者であるかを解き明かす資料ができるわけです。就職活動が始まった時点で自分の頭の中にあるものを慌てて引っ張り出すのではなく、常に参照できる状態にしておくことができます。

## 全学的な取り組みで 「進一層」の精神を涵養

本プログラムでは、効果測定のための独自の検定試験を開発する予定です。通常のマーク式の検定試験に記述式を加え、さらに教職員による面接を実施し、エンプロイアビリティの修得状況を総合的に評価します。これは、学生自身のキャリア形成に常に寄り添うだけでなく、次年度以降のプログラムの改善に生かしていくこととなります。このようなPDCAサイクルの考え方は、学外からも注目を集めています。

学生への面接には、専任職員だけでなく、教員も参加します。総合的に学生のキャリア形成を支援するためには、課外と正課の連携が必要だからです。キャリアセンターだけの活動にとどめたり、キャリア関連の講座を単発的に開講するだけではなく、全学的な体制で教職員が連携し、正課内外を通じて高めていくのです。これは4月から施行される新しい大学設置基準の

精神にも適ったものです。すべての教職員がプログラムの効果を実感し、その中身や運用について改善の意識を持つことが求められているのです。

本プログラムを通して、「コミュニケーション能力など、企業が求める力を伸ばすことは当然です。それに加えて、本学の理念である「進一層」、チャレンジ精神を涵養していきたいと考えます。じつと頭の中で考えるだけでなく、行動する積極性は、本学の特徴であると同時に、実は近年の学生には不足しているところでもあります。建学の理念に立ち返って、日々のキャンパスライフで「進一層」の精神を身につけてほしいと思います。

そのためにも、大学は今、学生に対して、人間的な成長を促すための活動の場を、多様な形で提供することが求められています。授業やサークル活動だけでなく、課外活動や地域連携、そして本プログラムなど、さまざまな学生活動の場を設け、それを支援することが、学生の行動力を高めることになるからです。大学が、学生たちが活動できる場を意図的につくることは今や社会的な使命でもあります。

本プログラムを通して、学生が自分を知り、そして深く学びたい欲求を持ったときに、今度は、正課の授業がその知的欲求に応えていくこととなります。本プログラムと正課の連携も強め、全学的な協力と知恵を集めて、「TKUエンプロイアビリティ養成プログラム」を磨き上げていきたいと考えています。

# 『大学の實力』取材記者に聞く

2008年度にスタート、新聞紙上ににぎわし、2010年秋に初めて単行本として発刊された『大学の實力』。いわゆる「ランキング」とは異なり、大学の實態と比較のあしがかりとなる各種データを「自己申告」で公表する形をとり、大学サイド、高校・保護者サイド、行政サイドにセンセーショナルともいえる大きな反響を巻き起こした。

個別の大学の「レントゲン写真」から何を読み取り、どう評価するか——。『大学の實力』が示した大学へのアプローチ手法

は、大学とステークホルダーの間に存在していた情報の非対称性の解消に貢献したといえるだろう。

『大学の實力』を企画し、いまも生みの親として全国の大学を取材しながら連載をつづけるジャーナリストであり、読売新聞記者である松本美奈氏が先日、東京経済大学を訪れた。ひと昔前とはすっかり様変わりした大学へのニーズと取り組むべきテーマなどについて、大学の實力、大学の真価とはなにかを中心に話をうかがった。

『大学の實力2011』  
(読売新聞教育取材班/中央公論新社)



09年・10年の7月に読売新聞で掲載された「大学の實力」調査の結果と、特集記事などを収録。調査は、新しい大学選びの基準として、約50の設問で構成。就職率や進学率、さらに退学率といったデータから、在校生への学習支援や生活支援の現状への自己評価などに及ぶ。また、学生への学習支援、就業支援など、現代の大学が行うさまざまなサポートについてリアルに取材・報告している。



読売新聞東京本社 編集局生活情報部  
教育ルネサンス取材班

松本美奈 記者

いたるところ、  
「担い手」不足にあえぐ日本  
今、大学に課されたMission

# ここ十年間の大学の变化は、かつてないほど大きなものです

## 大学史に残る 大きな変革の時を迎えて

日本で初めての近代的な大学として東京大学が設立されてから、およそ一二〇年が経ちます。そして今、大学関係者からは「日本の大学史の中でも、ここ十年間の大学の变化は、これまでにないほど大きなものだ」という声をしばしば耳にします。

『大学の實力』という記事の取材を通して、およそ三年間にわたって、全国の大学を見てきましたが、確かに自分が過ごした大学とはその姿は大きく変わってきていると感じます。

大学が変わる大きなきっかけの一つは、大学設置基準の改正、中でもファカルティ・デベロップメント(FD)教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み)の義務化でしょう。実際、読売新聞で『大学の實力』調査を行うきっかけになったのはFDの存在でした。

大学の教育力の組織的向上を、国が大学に義務として求めたのは、それだけ大學生の質が変わってきたからであり、今までと同じような教育のあり方では、大學生を育てることはできないと国が考えた

からです。かつて大学と言えば、一部のエリートが集う場所でしたが、しかし今、大学は大衆化し、高校生に二人に一人が大學生になっています。これまでと同じような教育では通用しないことは明らかでしょう。

## 国際競争が増す中 日本の大学は「ゆでがえる」に!?

ただ、大學生の質が変わってきたのは事実だとしても、教育力の組織的向上を「義務化」したことについては、違和感を覚えた大學生も少なくなかったはず。 「国は、自分たちに任せている、教育力を向上させることはできないというのか!」と。大学の自己改善力に国は期待していないのでは? そういうニュアンスで受けとめた大學生も多かったでしょう。

しかし、高等教育のあり方が激変しているのは、実は日本だけではありません。ヨーロッパでは今、国境を越えて大学改革を推し進め、高等教育の質を上げる「ボローニャ・プロセス」が、二〇一〇年間で十年間にわたって取り組まれました。これは、ヨーロッパ圏内の大學生、教員、研究者などの自由な移動を促進し、なおかつ非ヨーロッパ圏から移転する研究者



「TKUベーシックプログラム」が07年度大學生支援GPに選定されたのを機に新設された拠点「学習センター」。

などの数を増やそうというものです。ひと言でいえば、人的資源のアメリカ流出を食い止めようという取り組みなのです。

鉦物資源の乏しい日本にとって、言うまでもなく人材は貴重な資源の一つです。ヨーロッパ諸国もアメリカも人材育成に注力している中で、日本だけは旧態依然のままではないのか? 海外の高等教育改革を踏まえたこのような危機感は、中教審答申などから十分にうかがい知る

ことができました。

ある大學生が「日本の今の大学は、ゆでがえるに似ている」と口にするのを聞いたことがあります。ぬるま湯につかっていると、そうとは気がつかないうちに、いつのまにか脱出不可能な危機的状况に陥っている、と。それほどまでに厳しい表現で状況を捉えている大學生もいるのです。

## あるべき大学の姿は 目の前の大学生からしか見えない

大学に進学してくる子どもたちの質は、近年大きく変わり、それを受けて、大学もこれまでの常識で考えられないような支援を学生に対して行うようになりました。

例えば、高校卒業までの学習内容を大学で補習として学ばせる、いわゆるリメディアル教育は、国公立を問わず、今では多くの大学で実施されています。大学生が孤立しないよう、高校までのようにクラスを編成し、担任や先輩大学生が大学生活の相談にのったり、大学の学び方についてアドバイスしたりするといったことも、もはや珍しい取り組みではなくなりました。

大学の大衆化が進んだことで、勉強が苦手で、学習習慣が身につけていない学生へのケアが必要になり、また精神的にももろさが指摘される現代の若者を支える体制が大学に求められるようになったのです。

このような大学の現状に対して、「これでも大学か!」と嘆く大学人もいることはわかっていきます。自分が大学で学んだときの経験をもとに「大学とはこうある

べきだ」と考えるなら、今の大学は間違った姿にしか見えないでしょう。しかし、かつての大学を基準に今を考えても、目の前にいる学生が必要とするものは、何も生まれてこないのではないのでしょうか。

## 人材立国の日本にとって 大学は最後の砦

残念ながら、大学人の中には、「勉強しない学生たちが悪いのだ」と言っているばかりな人々もいます。記事を読んだ読者からも「幼稚園生ではなく大学生なのだから、そんなに手取り足取りやる必要はないのでは?」という辛辣な声も寄せられました。

しかし、私は思うのです。では、私たちは学生を、そのまま社会に送り出してよいのだろうか、と。隠さずに言えば、私自身、取材を始めた当初は、「今の大学はこままでやらないといけないのか」と驚きました。しかし、同時にこうも考えました。これを大学がやらなければ、日本はどうなってしまうのだろうか、と。企業には人材育成の余力はなく、家庭や地域の教育力も頼りにできない中、社会を生き抜く力を身につけていない若者をそのままにしていはいけません。「人」しか資源のない日本にとって、大学は最

後の砦だと私は思うのです。

以前、ある大学の学長は私にこう語りました。「確かに、これほどまでに学生を手取り足取り世話しなければいけないのかと言われることがある。だが、入学試験を課し、選抜してまで引き受けた学生を一人前にして社会に送り出す義務が大学にはあると私は思っている。そのためには出来る限りのことをしたい」。私はこの学長は、目の前の学生のことをよく理解している、素晴らしい学長だと思いました。評論家ならば、他人事のように「今の大学生はダメだ」と突き放せばいい。しかし、実際に学生と共にいる大学人にはそんなことは言えないでしょう。

う。目の前の学生をなんとかしたい、きっとそう思うはずですよ。

## 大学が手をかけただけ 学生は確かに成長する

例えば、授業に出席しない学生に対して、同級生や先輩学生が電話やメールで出席するように呼びかける。「甘やかしている」と言ってしまうはそれまでですが、これまでならそのまま退学していたような学生が、大学に足を運び、学び続ける。これは大変意味のあることなのではないでしょうか。

取材を通して、私が確かに感じたこと。それは、学生は大学が手をかけた分、必

# 大学がやらなければ、 日本はどうなってしまうのか



# 未知のものと向き合う教養の修得が大学教育のテーマに

ず変わるといことです。「大学は学生を甘やかしている」と非難する人たちに、私が自信をもって反論できるのは、大学で大きく育つ学生をたくさん見てきたからです。それまであまり勉強に熱心でなかった学生が、学問の魅力に初めて気づき、知的好奇心がまさに燎原の火のごとく内面に広がっていく……そんな事例を全国で目にしました。

東京経済大学が大学生の学びの基礎力として定義している「TKUベーシック力(10のチカラ)」には、「現代版読み書きそろばん」と銘打ち、「日本語力」「数的思考力」「英語基礎力」等が挙げられています。目の前の学生たちに不足しているものはなにか、学生本人も大学も明確に意識して、その伸長に取り組むことは、大学自身が伸びる可能性にもつながると思っています。

昔は、大学を測るモノサシといえば偏差値くらいしかありませんでした。そして最近、大学は様々な指標でランキングされるようになりました。ただ、ランキング1位の大学が、誰にとっても最適の大学であるとは限りません。ランキングで単純に比較するだけでなく、大学の自身を吟味し、自分に合った大学を探す時代に入っていると思うのです。

実際、高校現場でも「あの大学は学習支援センターの活動が充実しているから、進学後、キミの力を大きく伸ばしてくれるはずだ」といった進路指導が行われています。高校生も高校教師も、偏差値や知名度ではない、「大学の實力」に目を向け始めているのです。

だからこそ、大学にはこれまで以上の情報発信が求められます。補習教育を「大学として恥ずかしいことだ」と積極的にPRしないケースもあるようですが、そこで学生が学びの好奇心を抱いているのなら、「本学の学生はとも素晴らしい体験をしている」と自信をもって広く発信すべきだと思います。

## 異文化とコラボしていく コミュニケーション力が必要な時代に

これからの社会を生き抜く人材に必要な力は何かと問われれば、私はまずコミュニケーション力を挙げたいと思います。これは単にプレゼンテーションがじょうずであるといったことでは、もちろんありません。

私が考えるコミュニケーション力とは、専門外の人に自分の知っていることを伝え、そして手を取り合っただけでなく、コミュニケーションできる力です。では、コミュニ

ケーション力はどうすれば獲得できるのか。そこで生きてくることが、大学で身につける教養です。つまり、自分の文化を持ち、そのうえで相手の文化を受けとめて、しっかりと理解する。それは深い教養があつて初めて可能です。これこそ一つではないでしょうか。

異文化の人とコミュニケーションし、力を合わせて何かを創り上げるため、相

手の文化を理解し、自分の文化を語る教養を大学で身につける。もしかしたら、相手は人だけではなく、道具やシステムかもしれない。自分の知らないものとの向き合い、手を結ぶことができるのがコミュニケーション力であり、それを可能にする教養が、今後、「大学の實力」として社会から問われるのでは、と考えています。

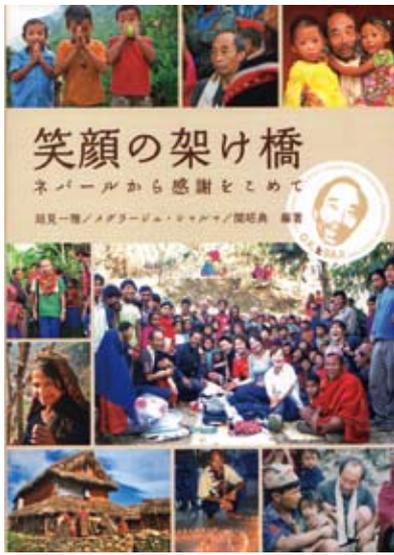
## 文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に「TKUベーシックプログラム」は選定されています

「社会人基礎力や学士力の修得」という『社会からの要請』に応え、「進一層の気概を持ち、責任と信用を重んじ、実践的な知力を身につけてグローバルな社会で活躍する人材の育成」という『本学の理念を具現化』するために、2007年度より基礎力修得支援の「ベーシックプログラム」をスタートさせました。すべての学部学生が身につけてほしい力を「TKUベーシック力(10のチカラ)」として定め、修得の具体的なガイドとなる『TKUベーシックカブック』を作成し、全学生に普及させています。

### ・10のチカラ

- ①「進一層の力」
- ②「TKU常識力」
- ③「日本語力」
- ④「数的思考力」
- ⑤「英語基礎力」
- ⑥「IT活用力」
- ⑦「TKUマナー力」
- ⑧「キャリア形成力」
- ⑨「調査・分析・論理的思考力」
- ⑩「実践的コミュニケーション力」

「TKUベーシック力」の修得支援を学習センターが担当。正課授業や課外のキャリア形成支援行事等と連携をとりつつ、学習センター独自の学習相談や講座・イベントを行っています。センターには、学びのきっかけとなる入門書を多数常備。さらに専任教員の相談員、職員サポーター、大学院生サポーターなど学内の学生・教職員が、ゆったりした時間・空間の中で、直接対面で学生のサポートを行っています。



# 東経大の学生たちが 心をこめた一冊

ネパールで支援活動続ける垣見一雅さんと  
彼を支える日本人支援者の言葉と思いを一冊に!

## 笑顔の架け橋 ネパールから 感謝をこめて



かき み かず まさ

### 垣見一雅さんと東京経済大学

発展途上国の中でも貧しい後発展途上国に位置づけられるネパール。その中部にある山岳地帯・東パルパの村々を周り、支援活動続ける垣見一雅さん。1993年から東パルパの山村に住み着き、村民のさまざまな相談事に耳を傾け、共に解決の道を探っています。年に2か月ほど日本に帰国し、そこで集めた寄付金でネパールの人々を支援。既に120にのぼる小学校や幼児教室を設立しました。支援は、生活インフラの整備にとどまらず、年間1,500人に奨学金を出しています。

つぎはぎだらけの服を着て、村で寝食を共にしながら、与えるだけでなく、共に解決策を考え、村民にも労働や費用を分担させ、支援

を続けます。日本の支援者は既に千人を超え、多くの支援金が集まります。垣見さんは支援者すべてに資金の用途を伝える手紙を送り、「自分はパイプ役でしかない。主役は日本にいるあなたです」と感謝の言葉を伝えます。そんな垣見さんの活動に対して、2009年には吉川英治文化賞が贈られています。

『笑顔の架け橋』は、21世紀教養プログラムやゼミでのネパール研修などを通して垣見さんと交流を続ける関昭典准教授と学生が、垣見さんの活動と思いを広く人々に伝えるため、約1年4か月をかけてまとめたものなのです。

# 「本作りを通して、人の縁のすばらしさに気付かされました」

現地の人と生活を通して  
ふれ合いました

初めてネパールで垣見一雅さんにお会いしたのは、2年生のときに参加した関ゼミの海外英語研修でした。十三日間の研修で最も刺激を受けたのは、水道も電気も満足にない環境で、それでも一生懸命勉強している子どもたちの姿です。自分はこのままでいいのかと率直に思いました。

く印象に残りました。いつも笑顔の垣見さんは、村の人たちから「OKバジ」と呼ばれています。バジはネパール語で「おじいさん」。垣見さんが「オーケー」を発するため、そう呼ばれるようになったのだそうです。ネパールは世界の最貧国と言われていますが、そこで生きる人たち、そして彼らを支援するOKバジこと垣見さんの生き生きとした表情に引き込まれてしまいました。実は初めてネパールに行く前は不安もありました。アメリカやイギリ

スの英語学校に行くわけではなく、現地の人と交流するといっても、いったい何をすればいいのか。そもそも自分にそんなことができるのか。でも現地に行くと、そんな不安はなくなり、水を汲んだり、同じ食事を食べ、同じ時間に寝起きする。そうして現地の人と一緒に生活する中で、気がつけば当たり前のように彼らとふれ合っていたからです。

の方たちと一緒に頑張ってきた仲間達を裏切ることができないと、すぐに電話をかけた直して「撤回します」と泣きながら謝ったこともあります。

## 本作りの苦労に、涙を流したことも

『笑顔の架け橋』ネパールから感謝をこめて』の制作は、3年生の春から始まりました。私の役目は、日本の支援者の皆様への対応でした。垣見さんは「主役は日本の支援者」という考えです。だから、日本の支援者の声を寄稿文として掲載するのは、垣見さんの願いでもありました。

本の制作は本当に大変でした。自分の仕事の不甲斐なさに落ち込み、また、他の仲間達や支援者に迷惑をかけたときなど、何度もやめようと思いましたが、実際に関先生に「やめます」と電話したこともあるんです。でも、協力して下さった支援者

原稿依頼の段階で、私のお願いの仕方に失礼があり、支援者の方に怒られたこともありましたが、でも、その方とは今ではご自宅に招いていたほどの間柄になりました。本作りを通して、思ってもいなかった人から鍛えられたことも財産です。そして普段の生活の中で意識しづらい「縁」というものが、実はとても身近にあることを学ばせてもらいました。垣見さんと支援者の方々、そして共に協力し合った仲間達に人の縁のすばらしさ、人間関係の可能性を教えてもらった気がします。



垣見さんの左隣にいるのが入澤さん。



東経大の学生たちが  
心をこめた一冊  
**笑顔の架け橋**  
～ネパールから感謝をこめて



指導教員 関昭典准教授

「学生は高いパフォーマンスを実現する  
潜在能力を持っています」

学生との共同制作を  
約束しました

本作りは学生と共同で進めるということは、垣見さんとの約束でした。垣見さんも私も、本学の学生にはそれができると判断していました。

英語の文章を翻訳し、写真に説明の文をつけ、そして支援者の方々に連絡して、原稿をお願いしたり…。学生たちは本当に大変だったと思います。しかし、ネパールで味わった感動がモチベーションとなって、高いパフォーマンスを発揮し、すばらしい本を作ってくれたと思います。

東京経済大学の学生に  
ふさわしい海外研修

垣見さんとの交流は英語研修の一環として始まったものです。既に十七年間もネパールの山奥で開発支援に取り組み、貧困や宗教についても熟知する垣見さんからは学

生は多くを学べるはずですが、現地の大学生との交流からは、学習の姿勢を学ぶはずだと考えました。英語のスキルを高めるのはもちろん、異文化適応力を育成するのは社会科学系の大学である東京経済大学では非常に重要なテーマです。ネパール研修は、本学に合ったものだと確信していました。

外国語の修得は、興味をもって学習を継続できるかどうかにかかっています。本学の学生は英語そのものへの関心とともに、英語を駆使して外国の人と接し、文化を知る機会も求めています。まさに異文化理解です。これまでネパールやインド及びタイで、貧困や教育の問題を間近に見ながら、現地の人々と深く接してきました。学生たちは文法などの間違えを恐れずに言葉を発し、自分の気持ちをアウトプットしてきました。その中で、英語の面でも、高いパ

フォーマンスを発揮しています。

異文化に適応していく中で、英語は自然と出てくるものです。そして、自分の英語が通じた経験、通じなかった経験が、学生にとって次の確かなモチベーションになるのです。

アジア教育交流研究会という組織を数年前に立ち上げ、アジア地域の教育交流や学生交流を促進する取り組みを重ねています。本研究会においても、今後学生たちがアジア諸国の学生交流の牽引役として活躍できる機会を与えたいと思っています。



『笑顔の架け橋～ネパールから感謝をこめて』

(1600円+税) (垣見一雅、メグラージュ・シャルマ、関昭典／編著)

本書には、垣見さん、関准教授らの鼎談、日本の支援者からのメッセージ、さらに制作に参加した東京経済大学の学生のコメントなどが収められています。また、本書にはカトマンズ大学大学院生が執筆した「OKバジ支援論」という論文を元に、OKバジのネパールでの支援活動を映像でまとめたDVD作品がついています(100%東経大の学生による作品です)。

■「笑顔の架け橋」購入ご希望の方は下記をご覧ください。

<http://aeee.jp/ok-baji/index.html>

※この本の収益は、すべて垣見一雅さんを通じて、ネパール支援のために使われます。

DVD  
付!

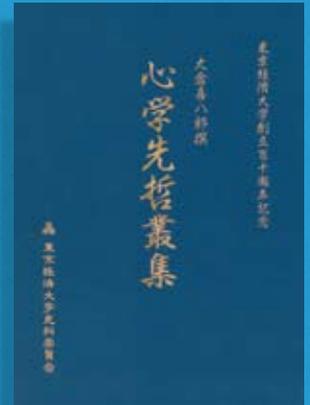


「進一層®」「TKUチャレンジ®」につながる東京経済大学の精髓がここに!

大倉喜八郎 撰

# 「心学先哲叢集」 を読む

2010年10月、東京経済大学の建学の精神である「進一層」と、それを現代風にアレンジした「TKUチャレンジ」が商標登録となりました。「責任と信用」を加えたTKUマインドは、創立者・大倉喜八郎が商人道について書きとめた『心学先哲叢集』からも読みとれます。創立110周年を記念して復刻された同書からご紹介します。



## しんがく筆のうみ

生業の みをよどまず

勤なば

ほそきしみづも

すゑは

瀧つせ

塩物屋

戯筆

## 心学筆の海

生業の道をたゆむことなく

勤めれば、

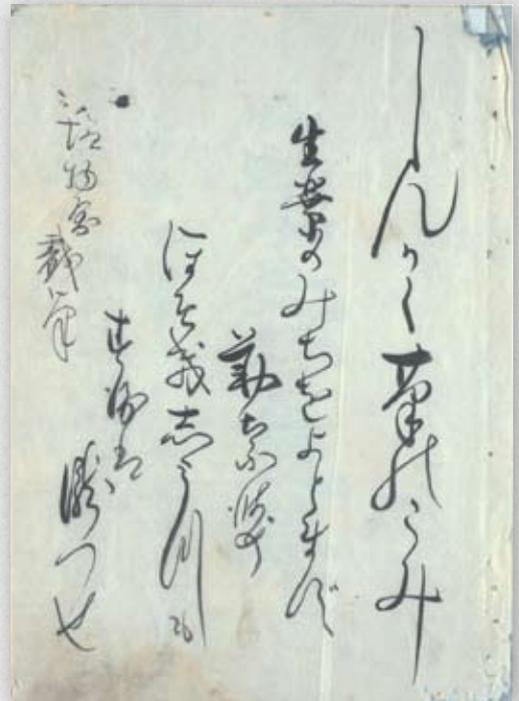
細い清水も、

末には勢いよく

流れる川となるものだ。

塩物屋

戯筆



## 『心学先哲叢集』はいかにして成立したか

本書の成立時期は、安政七年（1860年）閏三月末以前と推定されます。静雅堂春樹なる人物が大倉喜八郎を訪問したとき、喜八郎が江戸時代の随筆や実用書などから選んだ文章を書きとめていた『心学先哲叢集』を見つけ、ほかの人にも読ませるように勧めたのが起こりです。

人をうまく のせれば われは かつかる、  
太郎兵衛たろべえかごの 欲の世の中

天明老翁の詠

ことたれば たるに まかせて ことたらぬ  
たらで事たる 身こそ安けれ

※太郎兵衛駕 元通りで結局同じこと、差し引き同じ。  
寛政(1789)1801年)末から文化(1804)1818年)年間にかけての流行語。

人をうまく乗せれば自分は担がれるもので、結局差し引き同じなのが欲の世の中というものだ。

天明老翁の詠

満ち足りていると満ち足りにしがって不満足なものである。不十分でありながら満ち足りている身こそが安らかなのだ。

遊所の遊の字 遊興遊樂など続く あそびたのしむといふ字なり

故に遊所とは遊び楽しむ所と合点すべし 然るに

若輩の徒や放蕩家は 此樂所にて苦しむものあり 間違といふべし

又遊所家業は 客を樂しますが家業なるに 誤て客を苦ます者あり

客を樂まして苦ざれば 代々繁昌して大茶屋となり

また 樂しみが苦しみに変じるまで進めて金を遣す茶屋は

一代ぎりも保ちがたく 老て難義つがひをするものなり

遊所の遊の字は遊興遊樂など続いて熟語となる。あそびたのしむという字である。ゆえに、遊所とは遊び楽しむ所と承知しなさい。ところが、若輩者や放蕩家は、この楽しむ所で苦しむ者がいる。これは間違いといふべきだ。また、遊所の稼業は客を樂しませるのが仕事であるが、誤って客を苦しませる者がいる。客を樂しませて苦しめなければ代々繁昌して大きな茶屋となり、一方、樂しみが苦しみに変わるまで客を乗せて金を遣わせる茶屋は一代も保ちがたく、老いて難儀つがひをするものである。

古きふみに ある人朝鮮の役に軍用乏しくして、黒田如水くろだにすいす軒に金子五拾兩を借り 帰陳きんの後 返金せむと黒田の宅へ越しけるに 折から到来とて 鯛壹枚を家来持出 披露しけるに如水云 三枚におろし 身は塩にして貯ふべし 骨の処をこの客人にも我等にも給たまさせよと申ける 彼人心中に扱あつか々吝りんしんなる事哉かなと 賤いやしくもおもひける さて彼五拾金を返さんと指出し厚く礼を述べければ 如水この金をさらに請取らずして 因く 我はじめよりこの金をば進上せし積りなり 軍用に立し上は費つひにあらず 金銀の徳 我に於ても満足至極也とて 終にかたく辞して受ざりしと也 これらを以て 儉と吝との別をしるべき毫釐とすべし (三省録)

※黒田如水軒 黒田孝高(1546)1604年)豊臣秀吉に仕えた武将大名。  
※龜鑑 人の行動や判断の基準となるもの。手本。規範。

古い書に、ある人が朝鮮の役に軍用金が乏しく黒田如水軒に金五十兩を借り、帰陣した後に返金しようと黒田の屋敷へ行ったところ、ちょうど到来したといつて鯛一枚を家来が持つて出て披露したところ、如水が言うには「三枚におろして、身は塩にして貯えるように。骨のところをこのお客にも自分にも食べさせよ」と言った。客人は、内心でさて物惜しみすることだな」と卑しく思った。そして、例の五十兩を返そうと、差し出して厚く礼を述べたところ、如水はこの金を決して受け取らずに言うことには「私は始めからこの金を差し上げたつもりだ。軍用に立てたからには損失ではない。金銀が徳となり、私としても満足至極である」と言つて、とうとう固辞して受け取らなかったという。この話をもって、儉約と吝嗇の違いを知るべき手本とせよ。

## 当時の大倉喜八郎について

『心学先哲叢集』が編纂された安政七年(1860年)ごろは、越後から江戸に出てきた喜八郎が、丁稚見習いを経て乾物店を創業した時期と重なります。二十代の若き日、高売のかたわらに励んだ読書の成果をまとめたものです

夫人間一生は旅のごとし 正月の門松は一星塚なり

足の達者な人は七十里八十里百里もあるくべし

兎角身の養生をして 足さへ丈夫なれば長い旅が出来るなり

若へ内には道草かくひたく 隙行駒をべらぼうといふ棟杭にしばり付られ

色里の立場に居つづけをぶつくらわせ 終に借錢淵へはまりて

跡へも先へも参りがたく うかぐくとして居る内に

四十の坂を越 五十の立場へ足をふみかけ

頭へ霜がふりかゝり 花簪花振のはなもちりうせ

此時始て心付 あどふりかへりみても 若井村けつきの里へはかへり難し

とかくしんぼうを杖につきて 捺さへすれば老の坂道もらくくどこ

へます

二十四五里から三十里の間で 身の用心すべし (主従心得草)

※隙行駒 年月の早く過ぎ去ることの例え。  
※立場 街道の宿場と宿場の間で、人夫が駕籠や荷物を下ろして休息するところ。

そもそも、人間の一生は旅のようなものだ。正月の門松は一里塚である。足の達者な人は七十里、八十里、百里までも歩くだろう。何にせよ身体を大切に、足さえ丈夫であれば、長い旅ができるのである。若い内には道草が食いたくて、隙行く駒の喩えのように速く過ぎ行く年月をべらぼうという杭に縛り付けられ、色里という継立場に居続けをぶつくらわせ、ついに借錢の淵へはまつて、後へも前へも行きがたく、うかうかと暮らしている内に、四十の坂を越え、五十の継立場へ足を踏みかけ、頭へ霜が降りかゝり、花簪花振の花も散り失せて、この時始めて気がついて、後を振り返ってみても、若井村血氣の里という若かった昔へは戻れない。とかく辛抱を杖として、働いて稼ぎさえすれば老いの坂道も楽々と越えます。二十四、五里から三十里の間で身を慎みなさい。

## 大倉喜八郎の思い

『心学』は石田梅岩の石門心学のごとく、商人道を説いたものです。『心学先哲叢集』でも、質素儉約や正直を勧める内容や、変化する環境に適応する行動力、豊かな人間性の大切さを訴える文章が多く見られます。

### 油断をいましむ

入相の かねにおどろく 油売

おこたらず かせげ清水も 未は滝

夏の日も 届かぬ谷の あつ氷

曇りなき こゝろふり来る 難はなし

東都松魚節商人

大倉屋鶴吉主

### 油断を戒める

日暮れ時の鐘に驚く油売りであるよ。

怠けることなく稼ぎなさい。

源は細い清水でも未には

滝のような流れになるものだ。

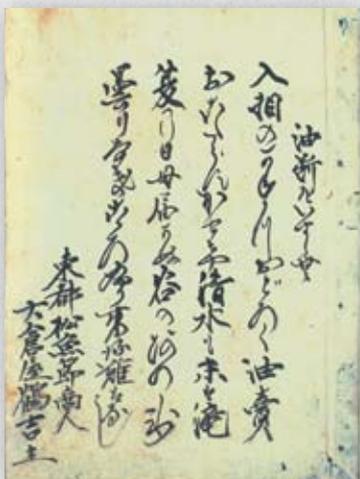
夏の日差しも融かすことができないのは

谷の厚い氷であるよ。

曇りのない心に降って来る災難はない。

東都鯉節商人

大倉屋鶴吉主



## 東京経済大学創立百十周年記念

大倉喜八郎撰

# 『心学先哲叢集』

復刻版

近世文学の専門家の原文の翻刻と現代語訳、語注、解説が掲載され、読者が平易に原文を理解し、撰者である大倉喜八郎を身近に感じる内容になっています。購入ご希望の方は、東京経済大学史料室までお問い合わせください。

東京経済大学史料室

電話 042-328-17955  
FAX 042-328-5900

## 東京経済大学に御寄付いただいた方々の御芳名

みなさまより多くの御寄付をいただきました。

ここに御寄付を賜りました方々の御芳名を掲載し、深甚の謝意を表します。

御厚志は、東京経済大学の教育・研究活動のより一層の充実のために有効に活用させていただきます。

今後とも、本学発展のために御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2011年1月

学校法人東京経済大学理事長 村上勝彦  
東京経済大学学長 久木重和

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

# 東京経済大学創立110周年記念 『次の10年』を考えるシンポジウム

9/15 WED

午後1時開演、午後6時終了

経団連ホール(東京・大手町)

主催:東京経済大学、中国・長江商学院

後援:日本経済新聞社

## 新分野・新企業が創る 東アジア新時代

プログラム・登壇者(敬称略):

第1セッション「日中ネットビジネスの今と未来」

第2セッション「日中企業の新たな形 ～グローバル時代を背景に」

総括セッション「ものづくりを超えた日中協力」



10/1 FRI

午前10時開演、午後6時終了

六本木ヒルズ森タワー「六本木アカデミーヒルズ49」

主催:東京経済大学、中国新華社『環球』雑誌社、国際協力機構

後援:朝日新聞社、日本経済新聞社、中国国家発展と改革委員会智力導引弁公室ほか

## 東アジア改革の行方

プログラム・登壇者(敬称略):

第1セッション「第三の三十年 中国の行方」

杉本和行(東京大学大学院教授 前財務事務次官)、安斎隆(セブン銀行会長元日銀理事)、周牧之(本学教授)ほか

第2セッション「成長と財政再建両立 日本の課題」

平野英治(トヨタファイナンシャルサービス副社長 元日銀理事)、森稔(森ビル社長)、円より子(元民主党副代表)、加藤裕己(本学教授 元内閣府大臣官房審議官)ほか

第3セッション「日中のFTA及び国際協力の展望」

伊藤元重(東京大学大学院教授 総合研究開発機構理事長)、小手川大助(IMF前理事)、小寺清(国際協力機構理事)ほか

第4セッション「東アジア時代へのイマジネーション」

船橋洋一(朝日新聞社主筆)、海江田万里(内閣府特命担当大臣 衆議院議員)、加藤紘一(衆議院議員)、周牧之(本学教授)

